談話室

昆虫採集の先にあったもの

男の子にとって，夏休みの宿題の定番が昆虫採集だったのはいつ頃までだったのだろうか。少なくとも私の少年時代は間違いなくそうであった。そして「虫好き」と言われる少年がクラスの中に結構いて，珍種の収集や標本作りの美しさを競ったものである。私もそんな少年の一人であった。チョウ，ガ，トンボ，セミ，バッタ，クワガタ･･･，「虫好き」にはそれぞれに得意な虫がいた。私の場合はチョウとトンボであった。

小学校の三年生の夏，両親の実家があった愛知県三河地方の谷川ではじめてオニヤンマを捕まえた瞬間を今でも鮮明に思い出す。とにかく大きなトンボで，黒い胴体に黄色の縞模様，眩いばかりのエメラルドグリーンの複眼，飛ぶ速度が非常に速く，飛行高度もかなり高い，要するに子供の手に余るトンボの王様であった。そんなオニヤンマも山地の小川に産卵するために同じところを何度も往復する習性がある。その時は飛行速度も少しは落ちる。その通り道を確かめ，ひたすら機会を窺う。狙いを定めるのだが，幾度も空を切った捕虫網，もうだめかと思いつつ仕切り直し，なおも挑戦する。そしてついに･･･。何回も何回も網の中を確認し，胸はどきどき，顔の紅潮が分かる。

こうして好奇心の虜になった私は，昆虫図鑑を見て憧れていたチョウやトンボを求めて採集の地理的範囲をどんどん拡げていった。当時名古屋市に住んでいたが，採集地は三重県の藤原岳，岐阜県の根尾谷，長野県の開田高原や入笠山，滋賀県の伊吹山等に拡大，いつの間にか国土地理院発行の５万分の１の地形図は手放せないものとなり，地形図をしっかり読図する能力が身に付いていた。その後私は昆虫採集以上に採集地で観察した自然と人間の営みとの関係に興味を持つようになり，大学では地理学を専攻する事となる。

地形の起伏や水資源，気候や植生の相違は人間の居住や生産活動にさまざまな影響を与える。たとえば急流性の河川が山地から平地へ流れ出す場合，運搬してきた土砂や礫を谷口に堆積して出来た扇型の地形である扇状地，集落は水が得易い扇端部に発達し，水田等の土地利用が進む。そして水の得難い扇央部

は果樹園や桑畑などに利用される。あるいは洪水の際，川の水が両側に溢れ，そこに土砂が堆積されて生じた微高地が自然堤防であるが，集落はこの自然堤防上に立地し，洪水を避けることとなる。このように人間は自然に働きかけ，その助けを得ることは出来ても自然を征服することは出来ない。「生物圏の進化は固体地球の変動や外宇宙からの影響と不可分であることが理解され，さらには生命進化史の筋書きは，予想できない偶然性の積み重ねの産物であるといった認識が決定的となった。(注)」現在，地球に優しくではなく，人間が地球から優しくしてもらうためにはどうしたらよいのかを真剣に考えることが必要である。自然と如何に折り合いをつけるか，その歴史と今後の知恵を地理学は教えてくれる。

大袈裟に言えば，私にとって昆虫採集は自然への畏怖を覚えさせてくれ，進路の道筋もつけてくれた。Study nature, not books!　という格言は大変重要であるが，今の子供たちが実行することは難しい。かつては大都市のなかでも原っぱにはチョウやバッタが一杯いたし，お寺や神社の境内ではセミがうるさいまでの鳴き声をあげていた。ましてちょっとした田舎で農業と密接に結びついた里山があるような地域では虫だらけといっても過言ではなかった。今，こうした風景は消えつつあり，虫の姿も簡単には見つからない。農薬や街灯や高速道路が虫減少の原因といわれたりするが，最大の原因は土地利用の変化であろう。林や原っぱや里山が，そして小川や池が無くなれば，虫たちは姿を消してしまう。今，さまざまなNPOが里山の保存や復活に尽力していると聞く。あるいは自然と調和することを目指している農業者も少なくない。そうすれば子供たちが思い切り昆虫採集に興じることが出来る場所が再び確保されるかもしれない。自然に親しむことが，子供たちにとってさまざまな夢あふれる進路を選択する一助になることを願わずにはいられない。

（注）丸山茂徳・磯崎行雄著『生命と地球の歴史』

（株式会社ニチレイ代表取締役社長　浦野光人・うらのみつど）